

## はじめに

東アジアには、著名な敦煌写経を始めとして、千数百年以前の書写経が数多く残されている。日本にも飛鳥・奈良時代に書き写された佛典（上代写経）が幸いにも残存している。千二百年以上前の紙本が現在まで伝世していること自体が世界的に希少であり、このなかには佛典を写した人物・年月日、写経にこめた願いを書き込んだものがある。これら写経の奥書にあたる部分を「識語」と呼称することとする。製作動機を明記している識語は、当時の人々の思考や社会背景を探ることが可能な第一次史料である。

上代の写経はその古さ・書体のすばらしさが美術史の分野から高く評価されているが、同じ飛鳥・奈良時代の第一次史料である金石文や木簡と比べると、写経の識語については、研究を進展させる余地がまだまだ残っている。

もちろん一九世紀の養鷗徹定以来、古写経に関する研究蓄積は少なくない。『寧楽遺文』や『日本古写経現存目録』などで識語の集成が行われ、鮮明な図版を掲載した図録も刊行されている。ところが識語本文に関しては翻刻・句読の誤りがみられるばかりではなく、統一した注釈もなされていない。特殊な字体や佛教語を交えた漢文からなることがその一因であろうか。

「上代文献を読む会」では、この写経識語を古代の第一次文字史料として正当に評価したいと考え、

訓読・注解を施すことを企図した。写経識語への学術的アプローチについてはいくつかの方途があると思われるが、まずは識語本文を〈読む〉ことに重きを置いたのである。

ここに、注釈原稿を作成した研究会「上代文献を読む会」について紹介することを許されたい。当会は、当初、故・吉永登先生を中心にして発足し、文学や歴史学を専攻する研究者が集まって上代の作品を輪読してきた。『古京遺文注釈』（桜楓社、一九八九年）、『風土記逸文注釈』（翰林書房、二〇〇一年）、『高橋氏文注釈』（翰林書房、二〇〇六年）がその成果であり、現在は井村哲夫先生を代表に仰ぎ、園田学園女子大学（兵庫県尼崎市）を会場として輪読と研究発表を続けている。

ここに取り上げる「上代写経識語注釈」も文学・史学・語学・佛敎史など各分野を専攻する参加者が発表し、月々の例会において議論を深めた。テキストは奈良国立博物館編『奈良朝写経』（奈良国立博物館、一九八三年）に掲載された写経の図版に拠り、「上代文献を読む会」のなかで編集委員会（稲城正己・遠藤慶太（委員長）・影山尚之・桑原祐子・廣岡義隆の五名）を設け、担当執筆者を交えて原稿に検討を加えた。一定の分量がある識語を選んで『続日本紀研究』に公表した。三八五号（二〇一〇年四月）より四〇二号（二〇一三年二月）まで、一八回にわたり連載を許された続日本紀研究会関係の方々に厚くお礼を申し上げる。

『奈良朝写経』所収ではありながら『続日本紀研究』には連載しなかった識語、また『奈良朝写経』未収だが図版によって本文を確認することができる識語の類をあわせて五一篇をも注釈の対象とし、大幅に増補を行った。全体の統一を図る意味もあり、遠藤が加筆または調整した箇所もある。

しかしながら、先行する研究に偏りがあるなか、手探りで進めてきたことに変わりはない。『続日本紀研究』掲載時に有益なご指摘をいただきながら、なお不備や誤読が存することであろう。あらためて江湖諸先学から広くご批評ご教示を賜り、写経識語の研究精度を高めたい。ご批判ご助言を乞う次第である。

遠藤慶太

目次

はじめに……………遠藤慶太(1)

凡例……………(11)

I 注釈篇……………1

1. 奈良朝写経識語……………3

奈良1 金剛場陀羅尼経……………丙戌 5 |

奈良2 浄名玄論卷第六……………慶雲3 12 8

奈良3 舍利弗阿毗曇卷第十二……………和銅3 5 10

奈良4 大般若経卷第二十四(長屋王願経・和銅経)……………和銅5 11 15

奈良5 大般若経卷第二百六十七(長屋王願経・神亀経)……………神亀5 9 23

奈良6 瑜伽師地論卷第二十一……………天平2 2 10

奈良7 大般若経卷第五百二十二……………天平2 3 上旬 76

奈良 46	大智度論卷第四十一	勝宝 5・5・18	298
奈良 45	說一切有部俱舍論卷第二十一	勝宝 4・5・1	292
奈良 44	大乘阿毗達磨雜集論卷第十六	勝宝 4・11・18	290
奈良 43	大般若經卷第三百八十	天平 21・3・9	289
奈良 42	瑜伽師地論卷第七十五	天平 20・11・10	287
奈良 41	成唯識論卷第二	天平 20・ ・	286
奈良 40	大般若經卷第五十七(善意願經)	天平 19・11・8	263
奈良 39	瑜伽師地論卷第二十一	天平 17・4・中旬	262
奈良 38	大般若經卷第五百九十一(春日戸比良願經)	天平 16・6・30	252
奈良 37	妙法蓮華經	天平 16・5・20	251
奈良 36	瑜伽師地論卷第六十五	天平 16・3・15	249
奈良 34	大般若經卷第四百一	天平 15・8・29	243
奈良 31	別訳雜阿含經卷第十(光明皇后發願一切經・五月十一日經)	天平 15・5・11	231
奈良 33	大智度論卷第五十四(春日戸廣田願經)	天平 14・(6)・(14)	217
奈良 30	大般若經卷第十二	天平 13・7・18	215
奈良 29	千手千眼陀羅尼經(玄昉願經)	天平 13・7・15	200
奈良 28	大般若經卷第五百七十七	天平 13・5・24	198
奈良 27	大般若經卷第四百七十一	天平 13・3・8	196

奈良 8	大般若經卷第五百十四	天平 2・3・上旬	78
奈良 9	根本說一切有部毗奈耶雜事卷第二十一	天平 2・6・7	80
奈良 10	法華經玄贊卷第三	天平 3・8・8	82
奈良 11	大通方広経卷下	天平 3・11・16	98
奈良 12	中阿含経卷第四十五	天平 5・6・4	99
奈良 13	大智度論卷第八十四(既多寺大智度論)	天平 6・11・23	101
奈良 14	七知経(聖武天皇勅願一切経)	天平 6・ ・	108
奈良 15	瑜伽師地論卷第八	天平 7・8・14	121
奈良 16	瑜伽師地論卷第六十	天平 7・8・14	123
奈良 17	大般若經卷第三百十九	天平 7・4・15	127
奈良 19	灌頂隨願往生経(石川年足願經)	天平 9・12・8	128
奈良 18	弥勒上生経(石川年足願經)	天平 10・6・29	140
奈良 20	大般若經卷第二百三十二(石川年足願經)	天平 11・7・10	147
奈良 21	仏頂尊勝陀羅尼経	天平 11・5・4	163
奈良 22	道行般若経卷第五(藤原夫人願經)	天平 12・3・15	166
奈良 23	十輪経卷第三(光明皇后發願一切経・五月一日経)	天平 12・5・1	178
奈良 27	大般若經卷第四百七十一	天平 13・3・8	196

2. 奈良朝写経未収識語

I	弥勒成仏経(石川卿願経)	天平2	8	459
II	瑜伽師地論(和泉監知識経)	天平2	9	461
III	大般若経卷第五百七十八(石川年足願経)	天平11	3	469
IV	大宝積経(手鑑「藻塩草」断簡)	天平12	3	480
V	如意輪陀羅尼経	天平12	4	484
VI	維摩詰経卷第下	勝宝2	4	496
VII	大般若経卷四百二十一ほか(家原邑知識経)	勝宝6	9	504

奈良47	大乘起信論	勝宝6	閏10	300
奈良48	瑜伽師地論卷第三十八	勝宝6	8	302
奈良49	大般若経卷第三百五十五	勝宝6	9	303
奈良50	灌頂経卷第七	勝宝6	閏10	305
奈良51	華嚴経卷第六十五	勝宝6	11	309
奈良52	大唐内典録卷第十	勝宝7	7	311
奈良53	梵網経(靈春願経)	勝宝9	3	345
奈良54	首楞嚴経(善光朱印経)	勝宝9	6	349
奈良55	大般若経卷第五十ほか(道行知識経)	宝字2	11	356
奈良60	佛頂勝陀羅尼経	宝字4	8	381
奈良61	浴像経	宝字5	2	385
奈良62	瑜伽師地論積卷第一	宝字6	3	387
奈良63	瑜伽師地論卷第五十三(光覚知識経)	宝字6	4	389
奈良64	金光明最勝王経卷第一(百濟豊虫願経)	宝字6	2	392
奈良65	大般涅槃経卷第二十九	宝字7	9	400
奈良66	大般若経卷第七十六(行信願経)	景雲元	9	402
奈良67	華嚴八会剛目章	神護元	4	417
奈良68	大毘盧遮那成仏神変加持経卷第七(吉備由利願経)	天平神護2	10	420
奈良71	十誦律卷第十七(称徳天皇勅願一切経・景雲一切経)	景雲2	5	424
奈良73	大般若経卷第三百九十五	宝亀3	11	435
奈良74	瑜伽師地論卷第二	宝亀10	3	437
奈良75	大般若経卷第七十六(坂上石楯追善経)	宝亀10	5	439
奈良76	瑜伽師地論卷第四十四	宝亀11	4	457

## II 論考篇

古代文字史料としての古写経識語	遠藤慶太	521
写経識語の字形点描	井上 幸	545
仏教信仰面からみた五月一日経願文の再考	ブライアン・ロウ	554
奈良朝写経題跋の二つの様式——知識と奉為——	稲城正己	577

## III 索引篇

上代写経識語要語索引	廣岡義隆	595
『奈良朝写経』題跋の用語の平安期願文等での使用例	稲城正己	641

あしがき	683
------	-----

## 凡例

- 一、【識語番号】
  - ・『奈良朝写経』（次項参照）については、その一連番号によった。五月一日経（23・24・25・26）、五月十一日経（31・32）、舍人国足願経（35、36）、善光朱印経（54・58・59）、吉備由利願経（68・69・70）、景雲一切経（71・72）は、そのうち一点の識語を代表させて注釈した。連番で飛んでいる識語は同一内容による省略である。また年代順に配列したため、番号順になっていないものがある。『奈良朝写経』に収められていない識語については、その内から七篇を選び、年代順にⅠ～Ⅶとした。
- 二、【翻刻】
  - ・奈良国立博物館編『奈良朝写経』（奈良国立博物館、一九八三年）の写真図版に従い、識語本文を翻刻する。
  - ・異体字なども含め、なるべく原文の用字を尊重する（旧字体・新字体の書き分けは底本のまま）。
  - ・増画・減画などは再現せず、特徴的な異体字は【注解】において言及する。
- 三、【所在】
  - ・対象経典の現蔵者を可能な限り記す。
- 四、【本文加点】
  - ・【翻刻】で示す本文に句読点・返点を施す。本文の行詰めは、文意を考慮して改める。先行の翻刻との異同について特に採りあげるべき場合は【注解】で記述する。
- 五、【訓読】
  - ・【本文加点】にしたがい訓読をする。その際、歴史的仮名遣い・常用漢字体で表記する。また仏教語については、基本的に呉音読みに従う。
- 六、【現代語訳】
  - ・訓読する本文についての現代語訳をおこなう。

七、【注解】

・訓読の根拠や語義・歴史的意義・仏教語の用例など、担当者が必要と認めた語について解説をおこなう。【翻刻】  
〜【訓読】までで出てきた問題についても、この項目で詳しい考察を展開する。

八、【補説】

・対象とする識語内容・経典について、担当者が必要と認めた論点をまとめる。

九、【参考文献】

・対象とする経典・識語に関する先行研究を列挙する。

一〇、【原稿作成者名】

・各項目の末尾に担当執筆者名を明記する。